



探しているものがある。普段はその存在すら忘れていたが、時折、ふとした拍子に思い出すもの。そして同時に、自分の心がどうしようもなくそれを求めていることに気が付くのだ。

* * *

誰かが何か言っている。自分のことを呼んでいる。

漆黒(うるしくろ)は、夢の中でそう思った。自分でも夢だとわかる程、やけに意識がしっかりした夢だ。だが、周りを見回しても闇があるばかりで、声の主の姿は見えない。

「おい、誰だ？ どこにいる？」

試しに声をかけてみたが、誰も姿を現さない。そればかりか、もともとぼんやりとしか聞こえていなかった声が、どんどん小さくなっていく。

「おい、なんなんだよ？」

冷静を装ってそう言いながらも、彼は自分が焦っていることを自覚していた。この相手を失いたくない。痛切にそう思った。

「おい！」

「……、……、黒」

名前を呼ばれた瞬間、黒の体は硬直する。誰も、自分が認識している限り、他の誰も、黒のことを下の名前と呼んだりしない。なのに、この声の主はそう呼ぶのか。

おまえは誰だ。そう言いたいのに声が出せない。右手が痙攣しているかのように、小刻みに震えている。

その手に、ふいに誰かの手が重なった。柔らかなぬくもりが、優しく黒の手を包み込む。その感触がひどく懐かしくて、離れてしまうのが嫌で、しっかり握り返そうとして。

そこで、目が覚めた。

瞼を開くと、目の前には見慣れた天井がある。その事を確認するように何度か瞬きをした後、黒は低くうめいた。

「またかよ……」

この夢を見るのは何回目だろうか。いつもいつも、同じところで終わってしまう夢。黒に懐かしさと切なさや驚きと、ぬくもりの記憶だけを残していく夢だ。

むくりと起き上がって時計を見る。朝の十時過ぎだ。

「……げ、寝過ごした」

本日ある、今年度最後の講義は九時からの一限だけだ。もうあと三十分足らずで終わってしまう。

「今日は休みだな」

そうぼやいて、前髪を掻き揚げかけた右手が、自分の体温に触れた途端止まる。

違う、あのぬくもりはもっと温かかった。

無意識にそんなことを思った黒は、その手を目の前に持ってきて、まじまじと見つめた。

何も持っていない右手は、しかし夢の中のぬくもりを覚えている。普段はその存在すら忘れていたくせに、こうして夢を見た後や、彼が精神的に参っている時などには鮮明に思い出すのだ。

同時に心が、そのぬくもりを求めて騒ぎ出す。存在しているかさえ怪しい誰かの手の温度を、ど

うしようもなく欲しているのだ。

「馬鹿馬鹿しい、なんだって言うんだよ……」

黒はうんざりと溜息をついた。そもそも他人の存在を求めるなんて、自分の柄じゃない。来る者拒み、去る者追わず。それが黒の基本スタンスだ。それなのに、夢の中では必死に相手を繋ぎとめようとするは、覚めてからはまたその相手を探しているは。正直、自分で自分が気持ち悪い。

だが理性は馬鹿馬鹿しい、柄じゃないと評していても、感情は見事にそれを否定しているのだ。

はぁ、ともう一度溜息をついて、黒は夢に関する思考を頭の中から追い払う。考えていたってどうしようもない。本当に自分に必要な者ならば、時がたてば向こうからやってくるだろう。

ベットから抜け出して窓を開ける。目の前は駅に繋がる通りで、少なくともはない人通りがある。だがここはアパートの三階なので、覗き込まれる心配はない。

カレンダーを見ると三月二十日。今日で黒が孤児院を出て、ちょうど五年だ。空はまるで記念日を祝福するかのような快晴で、柔らかそうな雲がふわふわと漂っている。もしかしたら院長から葉書でも来るかもしれない。

そんなことをつらつらと考えながら、何気なく視線を下に向けた。その途端、空を見上げていたらしい女性と目が合う。栗色の瞳が驚いたように見開かれるのがよく見えた。

そりゃ、空を見ていて誰かと目が合った、なんて、普通無いよな。黒がぼんやりとそう思った時だった。

目を丸くしていた彼女が、それはそれは嬉しそうに笑った。

「え……？」

驚いた黒が反応できずにいると、彼女はそのまま、駅の方に歩き去ってしまう。黒は呆然とその後姿を見送った。

「なんだ、今の……？」

思わず呟いてしまったが、悪い気はしなかった。そんな自分が心底珍しい。彼は窓を閉めると、身支度を整えて、朝食を食べるために町へと出て行った。

朝食を食べ、ついでに昼食をテイクアウトして、黒はアパートに戻ってきた。階段を上り終えて自室の扉に目を向けると、誰かがその前に立っている。若い女性のような。誰だか知らないが、とりあえず退いてもらわなければ部屋に入れたい。

「俺に何か用か？」

そう声をかけると、その人物はぱっと顔を挙げた。気の強そうな美人だ。どこかで見たような顔だが、いつどこで見たかは思い出せない。

「こんにちは。私、お隣に引っ越してきた者です。これからよろしくお願いします」

彼女はそう言って頭を下げた。どうやら挨拶に来たらしい。

「ああ、よろしく」

適当に返事をして、黒は続けた。

「それより、そこに居られると部屋入れないんで、退いてくれるか？」

「あ、あと、実はお願いが一つありまして」

こちらの話を聞いているのかいないのか、彼女はにこっと笑った。

「私、この街に来たばかりなのでよくわからないことが多いんです。教えてください」

「……悪いが」

「お願いします」

断わりの言葉を発しかけた途端、遮られた。丁寧な言葉遣いとは正反対の、断るなんてそんなことはしませんよね、とでも言いたげな素晴らしい笑顔付きである。その笑顔は、ここであからさまに拒絶すると後が怖そうだ、と黒に思わせるには十分だった。

「……俺は行動範囲がおそろしく狭いから、参考にならないぞ」

なんとか相手が引きさがってくれないものかと、彼は弁解じみた事を言ってみたが、効果は全くなかった。

「構いません。確実に私よりは詳しいでしょうから」

彼女はそう言って、にこりと笑う。これはもう、観念するしかなさそうだ。

「……………とりあえず、中に入りたいたいが」

黒が自室の扉を指差すと、今度は素直に退いてくれた。だが、彼が鍵を開けて中に入ると、彼女は後からちょこちょここと付いてくる。

「あれ？ 私の部屋と作りが違います。この部屋は土足なんですね」

「おい、誰が勝手に入っていいと言った」

「だって今教えてもらわないと、私なんにも行動できないじゃないですか。お店の場所とかわからないと、ご飯も食べれないし」

「それくらい、その辺散策してみればすぐに見つかるだろ？」

「私、ものすごく方向音痴なんです。右も左もわからないこの町で散策しようものなら、ここに帰り着くのに三日はかかります」

言い返してくる彼女はあくまで平然としている。その様子を見て、黒は大きく溜息をついてみせた。

「あんた、一言うと二も三も返してくる奴だな」

「褒めてくださってありがとうございます」

にこにことそう返してくる彼女に、黒は呆れた。今のは断じて褒め言葉ではない。面倒な奴に関わってしまったと、もう一度溜息をついた。彼女の方はというと、そんな黒の気分など気にもかけず、物珍しそうに部屋を見回している。

「……この部屋はもともと物置として作られたんだ。だから他の部屋より家賃が低いんだよ。その代り、キッチンも無いけどな」

だが何故か、トイレとシャワーはあるのだ。このアパートを設計した人間がいったい何を考えていたのか、まったくもって謎だ。

そう説明してやると、彼女はうーんと考え込んだ。

「アンネ・フランクでも住ませるつもりだったんでしょうか？」

「いや、いつの時代だよそれ。少なくともこのアパートができたのは、戦後三十年は経ってからだぞ」

「だから、『アンネの日記』の大ファンだったとか。じゃなかったら、知り合いに家出少年がいて、こっそり匿ってやろうと思ってたとか」

「……単純に、物置で作業していてもトイレに行けるし、汗をかいても流せるようにしたって考える方が自然だろ」

いつの間にか黒はベッドに、彼女の方はこの部屋に一脚だけある椅子に腰かけて話していた。黒の考えはお気に召さなかったようで、彼女は眉を寄せている。

「漆黑(しっこく)さんって、夢がないですねえ」

「悪かったな、俺は現実主義なんだ」

言い返してから、ふと気が付く。

「ん？ 俺、名乗ったっけ？」

扉の前で出会った辺りから記憶を巻き戻してみるが、そんな覚えはない。そして部屋の前の表札には、『漆』としか書いていなかったはずだ。本名を知らなければ、しっこくとは呼ばないだろう。

「ああ、大家さんに聞いたんです。隣に『うるしくろ』っていう、変な名前の男の子が住んでるよって。同じ年頃だから彼に色々聞くといい、とも言ってましたね」

「……つまり俺は、あの人にあんたの面倒を押し付けられたってことか」

大家のしれっとした笑顔を思い浮かべて、黒は頭を抱えた。ああ、あの人ならやりそうだ。文句を言ってやりたいところだが、あの人には少なからず恩がある。人に恩を着せることを嫌う黒は、できる限り早く返したいと思っているのだ。ならば断わる訳にはいかないではないか。どうせ大家の方は、そこまで見透かしてやっているのだろうが。

いつまでも黄昏ていても仕方ないので、黒は顔を上げた。

「で、あんたはなんで『しっこく』って呼ぶんだよ？」

「……………呼びやすいからです」

「なんだよ、今の妙な間は。……まあ、いいか。他にもそう呼ぶ人はいるしな。で、あんたは？」

よく考えたら、彼女だって名乗っていないのだ。黒自身が誰かの名前を呼ぶことはほとんどないので、気が付かなかったが。呼ぶ機会があるとは思えなくても、隣人となる以上、知っておいた方がいいのに越したことはない。

そう思っただけの言葉だったのだが、彼女は考えるそぶりを見せた。何故自分の名前を言うのに考える必要があるのだろう。そう思った黒は、思ったことをそのまま口にしようとした。だがそれより早く、彼女の方が口を開く。

「そうですね、偽善者とでもお呼びください」

「は？ 偽善者？」

オウム返しにたずねると、彼女はにこりと笑って頷いた。

「ええ。どうせ漆黒さんは人の名前を呼ばずに、おいだの、あんただので済ませるでしょう？ なら別に、名前なんてさしたる問題でも無いじゃないですか」

「……なんでそんなこと知ってたんだよ」

この女と出会って、まだ一時間も経っていない。そんなことまで大家が喋ったのだろうか。眉を寄せる彼の考えを察したのか、彼女は首を振った。

「見てればわかりますよ」

「……そういうもんか？」

「ええ」

自称偽善者は、先程とは違う謎めいた微笑みを浮かべながら頷いた。

新しく来た隣人は、本人の発言通り、大変な方向音痴だった。

彼女が来たその日、口で説明したり地図を書いたりするより早い、と黒は彼女を近くのスーパーまで連れて行った。その道すがらにはカフェもコンビニもある。駅はアパートから見える場所にあるので、スーパーへ行く道さえ覚えてしまえば、ある程度の生活はできるのだ。だが、帰り道に彼女を先に立たせて歩いてみると、度々違う方向へ行こうとする。

「待て、なんでそっちに行こうとするんだ。アパートがあるのはあっちの方角だぞ。それに、そこにさっき前を通ったカフェがあるだろう」

「あー、あれ？」

「あれ、じゃねえだろ……」

こんな会話を何度か繰り返した後、彼らはようやくアパートにたどり着いたのだ。

そしてその次の日、春休み前最後の課題を提出するために大学に向かった黒は、大学の最寄り駅で彼女の姿を発見した。なにやら困った顔をしている。無視しようと思ったのだが、通り過ぎる前に彼女に見つかってしまった。顔をしかめる黒に、彼女はぱたぱたと走り寄ってくる。

「なんであんたがここにいるんだ……？」

黒がうんざりしながら尋ねると、彼女は苦笑した。

「その大学に転入手続きをしに行く途中なんです。でも、迷っちゃいました」

そう言って彼女が指差すのは、紛れもなく黒の目的地だ。駅から徒歩約五分。正門は確かにわかりにくい所にあるが、だからといって迷う程でもない、はずだ。だが彼女は一時間近くも、この辺りをうろついていたらしい。

「あんた、ある意味天才だな」

黒がつくづく呆れてそう言うと、彼女は、そうかもしれませんと笑う。

「でも、運はいいみたいですね。ここで漆黑さんに会えましたもの」

「……おい」

なんとなくその先に続く言葉が予想できて、黒は彼女を睨みつけた。が、彼女はそれを綺麗に受け流す。

「漆黑さんもあそこの学生さんですよ？ ここにいるのも大学に用があるからですよ？ じゃあ連れて行ってください」

畳みかけるようにそう言って微笑む彼女に、黒は呆れを乗り越えて感心した。

「あんた、絶対大物になれるよ……」

「ありがとうございます」

黒は一つ溜息をつく歩き出した。彼女はそれに当たり前のようについてくる。

「で、あんたはどこに行きたいんだ？」

「はい？」

「どうせキャンパスに入っても、一人じゃどこにも行けないんだろ？」

黒の言葉に彼女はとても嬉しそうに笑った。

「はい。こんなに早く私のことを理解してくれてありがとうございます」

「いや、別に理解したい訳じゃないんだが」

「でも、今だって私に歩調合わせて歩いてるじゃないですか。昨日会ったばかりでこれって、なかなかできないですよ？」

そう言われて初めて、黒は自分の歩調が普段のそれよりもずっと遅いことに気がついた。

「あー、これはただの気分だ。……たぶん」

思わず言い訳じみた事を言うと、彼女はくすくすと楽しそうに笑った。

「それはそうと、あんたはどこに行くんだ？」

気を取り直してもう一度聞くと、彼女は肩にかけていたバックの中から一通の封筒を取り出した。

「えーとですね、まずは事務室で書類を提出して、それから学部総括の井上先生の所でも書類を提出して、ついでに挨拶もして、それで終わりです」

「学部総括の、井上先生？」

「はい」

「……あんたが転入する学部って、もしかして」

「経済学部です。ちなみに新学期から三年次に転入です」

「まじかよ……」

何を隠そう、黒が所属するのも経済学部の三年次。しかも彼女が挨拶しに行くという井上先生に、黒はこれから課題を提出しに行くのだ。

「あれ、もしかして、漆黑さんも経済学部なんですか？」

「の三年次になる。しかも俺はこれから、その井上先生の所に行く予定だった」

「あらま。じゃあ、これからも末長いお付き合いになりそうですね」

「勘弁してくれ」

黒は本気でそう思っているのだが、彼女はにこにここと笑うばかりだ。大学という所は人を避けようと思えばいくらでも避けられるが、一緒にいようと思えばいくらでも一緒にいられるのである。この調子では少なくとも、新学期開始後の一週間は、大学の中を案内して回らなければならないだろう。

「貸しにしておくからな」

主語もない、ぼそりとした呟きだったが、彼女はそれを正確に理解したらしい。

「むー、じゃあ、しばらく夕飯を作ってさしあげますから、それで貸し借り無しではどうでしょう？」

いつもいつも買ったものばかりでは、味気ないし、お金もかかるでしょう。

そう言って見上げてくる彼女をじとっと見下ろして、黒は条件を付け加えた。

「材料費、あんた持ちな」

「むむ。……仕方ないですね。その代わりに、ちゃんと案内してくださいよ。私が道を覚えられるまで」

「じゃあそれまで、あんたは夕飯係だな」

「わかりました。交渉成立、ですね」

「ああ。ほら、そこの一階が事務室だ」

黒が目の前の建物を指差すと、彼女は首を傾げた。

「……あれ？ いつの間にキャンパス内に入ってたんですか？」

「ついさっきだ。あんた、周りを見て歩かないから、道覚えないんだな？」

「そうかもしれません。じゃあ、ちょっと行ってきます。ちゃんと待っててくださいね」

そう言い残して走っていく彼女の背を見送って、黒は近くのベンチに腰をおろした。

空を見上げると、柔らかそうな雲がゆったりと動いている。今日は暖かいから、来週頃と言われている桜の開花が早まるのではないだろうか。もし春休み中に満開になるようなら花見をし

よう、と昨日来た院長の葉書に書いてあった。年を取っても相変わらず、お祭り好きは変わらないようだ。

そんなことを考えていた黒の頬になにか熱いものが当たった。驚いて振り向くと、目の前に缶コーヒーが差し出される。彼女が戻ってきたのだ。

「はい。お待たせしました」

「あんたか。……火傷したらどうするんだよ」

「大丈夫ですよ。そんなに熱いもの、自動販売機で売ってませんし、そもそも私が持ってこれません」

彼女はそう笑って黒の隣に腰掛けた。その手には甘いと評判のミルクティーが握られている。黒に渡されたのはブラックコーヒーだ。

「なんであんた、俺の好み知ってるんだよ？」

普通、よく知らない相手には自分と同じものか、お茶などの無難なものを渡すものではないだろうか。黒は好んで飲むが、ブラックコーヒーは苦手な人間も多いはずだ。

「いえ、なんとなく、好きそうだなあと。当たってよかったです」

けろりとそんなことを言う彼女を、黒はまじまじと見つめた。視線に気がついた彼女は、不思議そうにミルクティーを飲む手を止める。

「どうかしましたか？」

「いや、昨日の名前のことといい、すごい洞察力だな、と」

「そうですか？」

「少なくとも俺にはできないな」

「……ふーん」

なにやら難しい顔をしている彼女を横目で見ながら、黒は缶コーヒーを開けた。一口飲むと、程良い苦みとコーヒーの気品高い香りが口の中に広がる。

「ねえ、漆黑さん。ゲームを、しましょうか」

「は？」

唐突な言葉に彼女を振り向くと、彼女は空を見上げていた。その横顔からは何も読み取れない。

「この一週間、お互いのことを観察して、相手の好きなものを見つけるんです。で、一週間後にそれをお互いにプレゼントする。両方外れたり、当たったりしたら特に何もなし。片方が外れたら、もう片方のお願いを一つ聞くんです。お願いに対する拒否権はありません」

どうですか、と空を見上げたまま、彼女は言った。

「そんなの、俺が圧倒的に不利じゃないか？俺はあんたのこと何も知らないし、あんたみたいな洞察力も何もないんだから」

黒がそう言うと、彼女は少しだけ眼を細めた。見ようによっては、何かを懐かしんでいるような表情だ。

「そうでしょうか。好きなものなら何でもいいんですよ？一週間もあれば一つ位見つかるんじゃないでしょうか？」

「……あんたが今持ってるミルクティーとかでもか？」

「十分です」

「……………わかった」

「え？」

黒が返事をする、彼女はやっと顔をこちらに向けた。自分から誘ったくせに、黒が了承する

とは思っていなかったらしく、その顔には驚きが浮かんでいる。

「なんだよ？」

黒が眉を寄せると、彼女は軽く首を傾げる仕草をした。

「漆黑さんのことだから、面倒臭いの一言で切って捨てられると思ってました」

確かに普段の自分なら絶対に了承しないだろう、と黒も思う。でもなんとなく、本当になんとかだが、この女のことをもう少し知っておいた方がいい気がするのだ。

「別に、単なる気まぐれだ」

そう言いながら、黒は立ち上がった。空になった缶を近くのゴミ箱に捨てる。彼女も立ち上がったのを見届けてから、黒は歩き出した。彼女が付いてくるのを横目で眺めながら、先程の彼女のように空を見上げる。

「けど、あんたといると調子が狂うな」

呟いた言葉に対する反応はなかったから、おそらく彼女には聞こえなかったのだろう。

三日後の夕方。黒は彼女と共にスーパーにいた。未だにちゃんと道を覚えていない彼女の付添い兼荷物持ちとして、夕飯の買い物に付き合っているのだ。

「人参に玉ねぎに鶏肉に……。じゃが芋と白ワインは家にありましたから、あとはルーだけですね」

指折り数えながら確認する彼女に、黒は首を傾げた。今日の献立は聞いていないが、白ワインを使う料理とは何だろう。考えてみるが、何も浮かばない。それどころか、頭の中に白い靄(もや)が広がっていくような気がした。

「何を作るんだ？」

「クリームシチューですよ。言ってませんでしたか？なんだか顔色悪いですよ、大丈夫ですか？」

「聞いてないし大丈夫だ。でもなんでシチューにワインがいるんだ？」

ルーは調味料売り場にあるのに、何故か正反対の方向に行こうとする彼女の腕を引っ張りながら尋ねる。手に思ったように力が入らない。

「白ワインは鶏肉や豚肉の臭みを消してくれるんです。お肉をおいしく、やわらかくもしてくれます」

「へー」

「牛肉なら赤ワインですけど……。漆黑さん？ 本当に大丈夫ですか？」

その声が遠くから聞こえる気がする。おかしい、自分は彼女の腕を握っているのだから、彼女が遠くにいる訳がないのに。

黒は彼女の姿を探そうとしたが、視界がどんどん暗くなってきている。持っている買い物かごを落としてしまいそうだ。彼女が何かを言っているが、もはやそれすら聞き取れない。かろうじて買い物かごを地面に置くと、黒はそこで目を閉じた。

「黒っ！！」

誰かが自分の名前を呼ぶのが聞こえる。これは誰の声だろう。自分のことを黒と呼ぶ人間は、ただ一人そう呼ぶ人は、誰だったろうか。

黒の意識はそこで途切れた。

黒が目を開けた時、そこには薄暗闇しかなかった。額には何か冷たいものが乗せられている。しばらくじっと目の前を眺めていると、次第に目が慣れて、自室の天井が見えてきた。そこでようやく、黒は自分のベットに横たわっていることに気が付いた。

「起きたんですか？」

静かな声が聞こえて、ベットに投げ出されていた右手に小さな手が重ねられる。そちらに目をやると、彼女がベットのすぐ傍でイスに座っているのが見えた。辺りが暗いので、その表情はよく見えない。

「電気、つけないのか？」

「目が覚めたばかりで電気をつけると、眩しくて頭が痛くなりますよ」

「.....俺もそう思うが、同じ意見を聞いたのは初めてだ」

黒はまだぼんやりとした頭でそう返した。実際、彼は暗くないと眠れないし、朝日ならともかく電気が付いていると、それがたとえ常夜灯だとしても、目が覚めた時に頭が痛くなるのだ。小

さい時からそう主張しているのだが、孤児院では皆、逆に常夜灯が付いていないと眠れないと言っていた。

「でしょうね。私も一人しか、そういう人を知りません」

彼女はそう言って、黒の額に乗っていたタオルを取り上げると、自分の手を当てた。

「まだ熱いですね。……まったくもう、どうしてこんなに熱があるのに付いてきたんですか。いくら私でも、病人を連れまわしたりしませんよ」

彼女はそう言って、タオルをまた額に当てる。先程よりも冷たいから、別のタオルだろうか。

「気付かなかったんだよ。それにあんた、俺が付いて行かなかったら、また迷子になるじゃないか」

そう言ってから黒はふと、自分がどうやってここまで帰ってきているのかが気になった。彼女だけでここまで運んでくるには、無理がある。第一、彼女は道すら覚えていないのだ。

「俺、どうやってここに帰ってきたんだ？」

「スーパーに、ちょうど大家さんもいたんです。倒れた貴方を抱えて、どうしようかと思っている時にばったり会って。大家さんが背負って運んでくれました。もう結構なお年なのに、力持ちでびっくりしましたよ」

「……てことは、俺はまたあの人に恩ができたのか」

思わずげんなりと呟くと、彼女は少しばかり怒ったような声音で返してきた。

「大家さんにだけ、じゃないでしょう？」

「え？」

聞き返すと、握られた手に力がこもった。

「私ですよ、私！ いきなり倒れられて、どれだけ驚いたか……」

「あー、あんたか。驚いた、他にも誰かいたのかと思った」

「なんですか、その、私には迷惑かけても別にいいや的な発言は」

「いや、別にそんなことは思ってないが」

そうは言ったものの、心のどこかでそう思っている気が自分でもする。熱のせいだろうか。それにしても、彼女が隣に越してきてまだ一週間も経っていないのにな、と黒は苦笑した。

そんな黒に、彼女は覇気のない声で返してくる。明るく言おうとして、失敗しているような声音だった。

「思ってますよ、絶対に」

「そうかもな」

「ま、どうせ私は偽善者ですし？」

「自分で言うなよ。確かにそうみたいだが」

「ほら、そう言う。貴方こそ、昔っから、自分のことには無頓着で、心配ばかりさせて」

「ああ、よく言われる」

「……すごくびっくりして、もう起きないんじゃないかって本気で思ったんですからね。なのに貴方は、起きたら減らず口ばかりで」

「ああ」

「本当に、心配、したんですよ」

「うん、悪かったよ」

「だから、どうして、こんな時ばかり謝るんですか！？」

最後は完璧に涙声になっている。そんな彼女に苦笑して、黒は彼女の手を握り返した。その手のぬくもりが、言葉が、どうしようもなく懐かしい。前にもこんなことがあった気がする。よく

言うデ・ジャブだろうか。

「俺、孤児院で育ったんだ」

懐かしさに引きずられたせいか、黒は昔語りをする気になった。薄暗いため表情は見えないが、彼女がこちらを向く気配がする。話している間に泣き止んでくれるといいのだが。

「赤ん坊の頃に孤児院の前に捨てられてて、名前もいつ生まれたのかもわからない。置手紙一つなかったそうだ。役所に問い合わせても戸籍もない。だから、院長が俺に名前を付けて、孤児院に来た日を誕生日として、戸籍を作ってくれたんだ。その時に付けられたのが、漆黑(うるしくろ)。なんでも、その時来ていた服が黒一色だったから、だそうだ。」

「それはまた、ずいぶんと安直ですね」

彼女の言葉に頷いて、でもな、と黒は続けた。

「付けた当の本人はいつだって、しっこくって呼ぶんだ。あれは絶対に面白がってるね。で、院長がそう呼ぶもんだから、いつの間にか周りも皆、そう呼ぶようになってた。高校に上がると同時に孤児院は出たけど、学校ではいつも漆って呼ばれてたから、俺は結局今の今まで、下の名前で呼ばれたことがないんだ。まあ、俺としても、あんまり呼ばれたくないけどな」

「.....どうして、ですか？」

「さあ？ でも、なんとなく嫌だな」

「でも、仲が良い友達とかは下の名前で呼びたがったりしませんでした？」

彼女の言葉に苦笑してみせる。自慢じゃないが、人付き合いは苦手だ。

「俺がそこまで誰かと仲良くなったりすると思うか？」

「.....思いませんね」

「だろ？ 別に一人でもたいして困らなかったしな。たまに教師に呼び出されて、それも個性だとは思いますが、協調性はあった方がいいぞとかいう、妙な注意を受ける位だな」

そう言うと、彼女はくすりと笑った。泣き止んだようだ、と黒はほっとする。いくら人付き合いが悪くても、誰かの泣く顔を見るのは好きじゃない。

「お腹空いてませんか？ 一応クリームシチューとお粥と両方作ったんですけど.....」

そう言う彼女に、ならお粥を、と頼む。

だが、彼女が立ち上がりて手を放そうとすると、黒は慌ててその手を握り締めた。どうしてか、手を放すのが怖い。そんなことはあるはずなのに、手を離せばもう二度と、彼女が戻ってこないような気がした。

「どうしました？」

「.....いや、なんでもない。...けど、やっぱ食事は後でいい」

「え？ あ、はい。わかりました」

彼女はまた椅子に戻ると、じゃあ、と口を開いた。

「暇つぶしに、私の子供時代もお話しましょうか」

「ああ」

頷くと、彼女は懐かしそうな声音で話し始めた。

「昔、仲の良い男の子がいたんです。というか、私が勝手にくっついていたんですけど」

「あー、あんたなら、相手にどんなに嫌がられてもやりそうだな」

黒が茶々を入れると、彼女はふっと笑った。

「ええ、それはもう。どっちかっていうと、名前を呼んだら邪険にされたから、頭にきて決心したんです。絶対こいつと仲良くなってやろうって。でもその子もその子でひどいんですよ。最初の二年間、毎日毎日話しかけても、うんともすんとも言ってくれないんです。で、二年目にして

初めて返ってきた反応が『うるさいからあっちに行け』ですよ」

「それ、よっぽどあなたのことが嫌だったんだろう」

「まあ、そうかもしれませんが。でもその後から、生返事はしてくれるようになったんですよ。たぶん相手は私を追い払うのをあきらめただけで、会話には程遠かったですけど、最初の頃に比べたらすごい進歩です。それでまた、毎日話しかけていたら、半年後に初めて、ちゃんとした返事が返ってきました。それから時々、ちゃんと会話してくれるようになったんです。で、それからまた一年後に今度は向こうから話しかけてくれたんです。まあ、内容は『先生が呼んでるぞ』だったんですけど」

「それ、話しかけたって言うのか？」

「言うんです。それまでは誰に頼まれたって、そんな伝言すらしてくれなかったんですから。その一年後には、初めて名前を呼んでくれました。その後はもう、何をするのも一緒でしたね。傍にいても何も言わなくなりました」

「……つまり、あなたは四年半延々と毎日話しかけたって訳か」

「ええ。ま、粘り勝ちですね。仲良くなろうって決心したのが五歳の時で、そこまで辿り着いた時にはもう十歳になろうとしてました」

「なんか、すごー同情するよ。相手に」

黒がそう言うと、彼女はおかしように笑った。

「その子ですよ。暗くないと寝れないし、起きた時に電気が付いていると頭が痛いって言っていたのは」

「あー、じゃあ俺とそいつは似てるのか」

「はい、そっくりです」

「で？」

「はい？」

「その後そいつはどうしたんだ？」

単純な好奇心から聞いてみたのだが、彼女はちょっと寂しそうに言った。

「十四歳の時に私が外国に行かなきゃいけなくなって、その後連絡が取れなくなってしまったんです」

「そうか。……そいつ、ほっとしただろうな」

「相変わらずひどいですねえ。私は四年半の努力が水の泡になってしまったんですよ？」

「だからだよ……」

話を聞き終わったと同時に、また黒は眠たくなってきた。小さくあくびすると、彼女が優しい声で尋ねてくる。

「……寝ますか？」

「ああ」

「じゃあ、おやすみなさい」

結局その夜は、ずっと手を繋いだままだった。

事の発端は本当に些細なことだった。

黒が倒れた日から二日後、全快した黒は、服を買いに行きたいから、デパートまで連れて行ってほしいと彼女に頼まれた。寝込んでいる間世話をしてもらった恩もあるので、黒は三つ隣の駅にある大手デパートまで彼女を連れていった。

そこで二人は、一人の迷子に出会ったのだ。じっと泣くのを我慢している小さな男の子を、迷子センターまで連れて行きましょう、と彼女は言った。そこまでは良かったのだが。

「は？ 親が来ない？」

それからしばらくして、帰る前にその子がどうなったか知りたい、と彼女が言うので、黒はもう一度彼女を迷子センターまで連れて行った。そこで、二人は驚くべきことを聞いたのだ。

なんでも、何回か迷子の呼び出しをしても親が迎えに来ず、係員がその子を持って余していると、通りかかった人がこう教えてくれたらしい。その子の母親はしばらく前に、急に倒れて、救急車で運ばれたよ、と。その人は、その子も一緒に救急車に乗って行ったと思っていたとも言っていた。そこで近くの病院に問い合わせたところ、母親は現在集中治療室に入っているらしい。そして父親とはまだ連絡が付かないのだとか。つまり、その男の子を迎えに来れる人間は誰もいないのだ。

そこまでの事情を聞いて、黒は大変そうだなと無感動に思っていた。だがその隣で、彼女は真剣な顔をして係員に尋ねたのだ。

「その病院、どこですか？」

彼女の問いに、黒は驚いた。何を言い出す気だろう。

「私がこの子をそこまで連れて行きます。そうすれば、少なくともお母さんと一緒になれるんでしょう？」

「って、ちょっと待て」

黒の制止も聞かずに、彼女は係員から病院名を聞くと、その子を引き取ってしまった。

「あんた、何考えてんだよ……」

歩きながら黒が呆れてそう言うと、男の子の手を引いた彼女は困ったような顔をした。

「だって、かわいそうじゃないですか。お母さんが大変なことになっているのに、こんな小さな子が、家族もいない、誰も知らない場所でじっとしているなんて」

「あいにくと、俺には家族なんていないもんでね。その気持ちはわからない」

黒がそう言うと、彼女が溜息をついた。

「……黒」

思わず口をついて出たような、どこかたしなめる響きの口調で呼ばれた名前に、黒は一瞬固まった。もやもやと、胸の内に溜まるものがある。それはおそらく、苛立ちと怒りと悔しさと、悲しみだ。なぜ悲しいのか、黒自身にもわからない。わかるのは、その感情の原因は下の名前を呼ばれたことに関係しているということだけだ。

「うるさい、その名前で呼ぶな」

そう吐き捨てるのと、彼女を睨みつける。

「俺は行かない。行くならあんた一人で行け」

初めての土地ではほぼ確実に迷子になる彼女が、一人では辿り着けないことなど承知の上だ。何かを言おうと口を開きかける彼女をもう一度睨みつけ、黒は彼女を置いて歩き去った。

そのままアパートに帰り、ベットにごろりと横たわる。

「……ちくしょう」

まだ、胸の内のもやもやが消えない。呼ぶ人がいないはずの名前に、感情がかき乱されている。心の片隅で、なにかが反応したがつている。耳の奥に、彼女の声が響いている気がした。

「なんだって言うんだよ……」

そう呟いて、黒は眠りへと引き込まれていった。

目を覚ますと、辺りは暗かった。時計を見ると二十二時だ。ずいぶんと長いこと眠っていたらしい。

「……あいつ、帰ってきたのか？」

怒りに任せて置いてきてしまったが、流石にこれで何か起きていたら後味が悪い。隣の部屋に耳を澄ませてみるが、何の物音もしなかった。壁が薄いので、人が動き回っていれば気配位はわかるのだが。

「……しょうがねえな」

黒は部屋を出ると、隣の部屋の扉の前に立った。ノックしてみるが、返事はない。まだ帰っていないのだろうか。試しにノブを回すと、あっけない程簡単に回った。

「おい、いるのか？」

部屋の中は文字通り真っ暗で、何も見えない。鍵をかけずに出かけたのだろうか。そう思いながら電気をつけて、黒はぎょっとした。

彼女が玄関からすぐの所に倒れていたのだ。

「おいっ、しっかりしろ！ おい！！」

慌てて抱き起こすが、彼女はぐったりしたままで反応はない。呼吸は浅く、脈を測るとひどくゆっくりだった。氷塊が、背筋を駆け下りたような気がした。

「おい、こらっ！ 目を開けろ！」

青白くなっている頬を軽く叩きながら、黒は必死に呼びかけた。

「おい、起きろ！ 白(あき)！！」

とっさに呼んでから、黒は目を見開いた。

今、自分は何と言った？ のろのろと片手で自分の口を押さえる。あき、と小さく呟いた。

それは確かに、知らないはずの、彼女の名前だ。黒、と自分の名を呼んで笑う少女の姿が脳裏に浮かんで、はじけた。

次々と、今までの彼女の言動が浮かぶ。

—見てればわかりますよ

—私も一人しか、そういう人を知りません

—昔っから、自分のことには無頓着で、心配ばかりさせて

—だから、どうして、こんな時ばかり謝るんですか！？

—昔、仲の良い男の子がいたんです

思い出した。自分は、ずっと昔、彼女に会っている。六年前、黒が孤児院を出る一年前まで、ずっと傍にいた、強引で方向音痴で洞察力の鋭くて、よく笑う少女。あの頃よりずっと大人びてはいるが、それでも彼女は間違いなく、雪白(きよみあき)だ。

「……く、ろ？」

かすれた声で呼ばれて、黒ははっと彼女を見た。

「なんて顔、してるんですか……」

「白、お前…なんで…」

「あ、やっと思い出しましたね。まったく、本当に、四年半の努力が、水の泡になるかと思い、ましたよ……」

途切れ途切れにそう言って微笑む白に、黒ははっとした。とにかく、救急車を呼ばなければ。だが、彼の思考を読み取ったのか、彼女はゆっくりと首を振った。

「無駄です、よ。救急車を呼んだって、何もできません、から。それより、そこの棚に載っている薬を、取ってください」

黒は言われるままに薬を取ると、水と共に彼女に飲ませる。そうすると、少しは楽になったのか、白はほっと息をついた。その表情を見て、黒は唇をかんだ。

雪白(きよみあき)。漆黒(うるしくろ)と対になるよう付けられた名。彼と同じ年に孤児院に連れてこられた女の赤ん坊に、これもまた院長が付けた名だ。

誰もがしっごくと呼んだ彼を、彼女だけが黒と呼んだように、誰もがせっぽくと呼んだ彼女を彼は白と呼んでいた。最初の方こそ、彼女の昔語りの通り邪険にしていたが、それでも白は黒にとって特別な存在だった。

それなのに、黒は白に関する記憶をすべて失っていた。どうして忘れていられたのか、自分でも謎だが、それは彼の、無意識の自己防衛だったのだ。

呼吸が収まってきた彼女を抱いたまま、黒は壁に寄りかかった。何を言ったらいいのか、わからない。すると、白の方から話しかけてきた。

「ちゃんと、送り届けて、帰ってこれましたよ」

あの迷子のことを言っているのだ、と気付いた黒は、なんとか苦笑してみせた。

「とてつもない方向音痴の癖に、よくできたな」

「デパート出てすぐ、タクシーを捕まえたんです。そうすれば、道がわからなくてもたどり着けますから」

「……なるほど」

「黒が帰ったりしなければ、余計なお金はかからずに済んだんですけどね」

「お前が勝手にやったんだろ」

六年前と変わらない軽口の応酬に、時間が巻き戻ったような気さえする。それでも、黒は尋ねずにはいられなかった。

「白、お前、生きてたのか……？」

「ああ、やっぱり、死んだって聞かされてました？」

黒が黙って頷くと、今度は白は苦笑してみせる。

十四の時、ある夫婦に引き取られた白は、その夫婦に連れられて外国へ行き、そこで事故にあった。夫婦は即死。そして彼女も亡くなったと、その頃黒は聞かされた。その事実を受け止めきれずに、彼は無意識に、彼女に関する記憶をすべて封じて込めてしまったのだ。

「まあ、確かに死にかけましたけど。五年間ずっと集中治療室に入って、二十近くの手術を受けたんです。幸い両親の、といってもそう呼べたのはたった二カ月程度でしたけど、遺産がたくさん残されていたので、で、なんとか一命は取り留めたんですけど、流石にあれだけ手術をすると、体が持たなくて。心臓がすっかり弱っちゃいました」

「それで、この状況か？」

「ええ。たまに発作が起きるんです。どれだけ治療しても、余命はあまり長くないだろうって。病院にいるべきだって周りに言われたんですけど、それなら自分の好きなことをしてから死に

たいて、駄々こねて退院して、こっちに帰ってきました。どうせなら、たとえ忘れられても、黒の傍に居たかったですし」

「……知ってて、来たのか？」

扉の前で会った時、彼女は初対面を装っていたはずだ。

「事故から三年後位から、院長に定期的に連絡してましたから。ここに来る前に、会いに行きましたしね。驚きましたよ、あの明るい人がすっごく暗い声で、実は…って話し始めるんですから。内容はもっとショックでしたけど」

あくまでも笑いながら、白はそう言う。黒はぐっと息をつめた。忘れていた自分は、覚えている彼女に向って、結構ひどいことを言ってきたはずだ。

「ごめんな」

「別に、黒が謝ることじゃないでしょう。そんなつもりはなかったんでしょし。それに、そんな自己防衛をしなきゃいけない位に、黒は私のことを好きでいてくれたんだな、って思ったら結構嬉しかったですよ。これで平然と、なんだ、生きてたのかって言われた方が傷つきます。」

だいたい、黒が忘れてるのを承知で来たんですから、これは私の我儘ですよ。

そう言うのと、疲れたのか、白は眼を閉じた。その潔い態度が、どうしようもなく懐かしい。黒は彼女を抱く腕に力を込めた。

「やっば、お前、偽善者」

「まだ言いますか、こんなに広い心を見せている幼馴染に向かって」

「だからだよ、馬鹿。……なんでお前は、そんなに強いんだ」

そもそも、彼女を最初に『偽善者』と呼んだのは黒なのだ。事あるごとに、彼は白を『偽善者』と呼び、軽口を叩き合っていた。

「別に強くなってるんですよ。ただ単に、発想の転換がうまいだけです」

「それができるから強いて言ってるんだよ」

黒はそう言って、右手で白の左手を掴んだ。

「……………俺、ちょっとだけ覚えてた」

黒がそう呟くと、白はゆっくりと目を開ける。その瞳を見ながら黒は続けた。

「お前のこと忘れてたけど、お前の声と、手の温度、何度も夢で見た」

自分が探していたのは白だったのだ、と今更ながらに黒は痛感する。その証拠に、彼は白と再会してから一度も、あの夢を見ていないのだ。そう告げると、白は困った顔をした。

「それは、喜んでいいんでしょうか？ 綺麗さっぱり忘れてた方が、黒は楽だったでしょう？」

「さあな。もう終わったことだし。……でも、なあ、あとどれくらい、一緒にいられるんだ？」

白の体は確かに弱っているのだろう。脈は落ち着いてきているが、まだ体温が低いままだ。黒が覚えているぬくもりよりも、ずっと低い。それでも根底にある温かさは同じなのだから、不思議だ。

だがこのような発作に、何回も耐えられるとは到底思えなかった。

「んー、病院を出る時には、外に出たら一カ月持たないぞって脅かされたんですけど、もうとっくに過ぎてますからねえ。あとはもう、神のみぞ知るって感じですかね。心不全とか、いきなり起こるって言いますし」

「でも、大学に転入するんだろ？ そういえば、お前、学校どうしてたんだ？」

「ああ、あれは入院中に、向こうの通信教育受けて、単位を取ってたんです。どれだけ生きられるかは全くわかりませんが、黒が行ってる大学に興味があったので、とりあえず転入手続きしてみました。通えたら、いいですね」

「……そんなに望み薄なのか？」

「期待しないでください、とだけ言っておきます」

「……そうか。……じゃあ、とりあえずあと二日は絶対持たせるよ」

黒がそう断言すると、白は軽く首を傾けた。

「なんでですか……？」

「賭けが成立しないだろ？」

お前が言い出したんだからな、と告げると、白は笑った。

「努力します」

そう言って、白は目を閉じた。

賭けの結果がどうなったのか、それは黒と白と、神のみぞ知る